

Melville の Hawthorne 論の諸問題

(Hawthorne と Melville の関係)

松 山 信 直

“Genius, all over the world, stands hand in hand, and one shock of recognition runs the whole circle round.”¹

I

メルヴィルが一バージニア人の匿名で発表した評論 “Hawthorne and His Mosses” は、1846年に出版されたホーソーンの *Mosses from an Old Manse* の書評の形をとりながら、単にホーソーンを論じるだけでなくシェイクスピアをも論じ、さらにアメリカ文学の独自性を弁護したばかりか偉大さをも称揚した文学論である。その意味で、この評論はアメリカの文学批評の一環として重要な位置を占めていることは勿論だが、メルヴィルとホーソーンとの関係にとっても重要な役割を果たしたことは言うまでもない。この評論はメルヴィルがホーソーンの作品に触発されたことに端を発し、ホーソーンその人に出会ったことから活字になったと言えるのだが、メルヴィルのホーソーンに対する理解の程度と質を示すだけでなく、当時のメルヴィルの関心の有り様を示し、さらに二人が出会った1850年8月5日の出来事とも深く関わっている。

このホーソーン論は1850年8月17日と24日の二回にわたってダイキンク (Evert Duyckinck) が編集していた *Literary World* 誌に掲載された。ところが、メルヴィル自身による校正を経なかったため、植字工の誤解や編集者の改変などのテキスト上の問題があった。² その後この評論はメルヴィルの

存命中に再刊されることもなく、あまり注目されなかったけれども、1938年になって、ソーブ (Willard Thorp) がこの評論を *Herman Melville/Representative Selections* に収録して出版した。ソーブはこの評論の原稿をダイキングが残した *Literary World* の無署名の投稿原稿の束の中から発見して、*Literary World* 中の誤りをこの原稿にもとづいて改めたが、まだ問題があった。³ その後レイダ (Jay Leyda) が再び原稿にもとづいた版を *The Portable Melville* (1952年) に収録したが、⁴ 依然問題があった。一方エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) はこの評論中の Melville 自身の言葉をもじって表題にした *The Shock of Recognition* (1955年) にこの評論を収め、多くの人の目に触れる機会を与えたが、ウィルソンが使用した底本は *Literary World* に掲げられたものであるらしく、テキストの厳正さの点では一歩も二歩も後退したものだった。⁵ 1966年の *Moby-Dick* の “Norton Critical Edition” において、ヘイフォードとパーカー (Harrison Hayford & Hershel Parker) はメルヴィルの妻が清書し、メルヴィル自身が加筆訂正した原稿の改変を仔細に検討し、“authoritative text” と称した版を出版し、⁶ 更にメルヴィル全集の Northwestern-Newberry 版では、筆者の意図したものと思われるテキストを確立した版を出版した。⁷

このようなテキスト上の問題の多くは、メルヴィル自身が校正をしなかったために起こったのだが、最初にこの評論を掲げた *Literary World* の編集者ダイキングは、メルヴィルに校正刷りを送る時間的余裕のないまま印刷を急いだものと思われる。なぜそんなに印刷を急がなければならなかったのか。この辺にもこの評論にまつわる問題が顔を覗かせていると言ってもよいだろう。

ここでこのホーソン論について全面的に論じる紙面の余地は到底無いので、ポーの批評との関連、1850年8月5日のメルヴィルとホーソンの出会い、執筆時期など、どちらかといえば周辺的だが、この評論の理解にとって基本的な二・三の問題に焦点を絞って考察することにした。

II

まず “Hawthorne and His Mosses” の要旨をみてみよう。メルヴィルはホーソーンの明るい面を持ち上げ、ヒューマーと愛とが高く飛翔し (NN, p. 242), 「大きな深い知性」(242) が窺えることを賞賛する。ところが読者は「彼の放つ 陽光に 魅惑されるかもしれない」(243) けれども, 「世間はナサニエル・ホーソーンのこうした面にたぶらかされている」(243-244) とメルヴィルは言う。というのはホーソーンの明るい面の彼方には「闇の暗黒がある」(243) からだ。私を「これほど引き付け魅惑して止まないのは……ホーソーンの内にあるあの暗黒なのだ」とメルヴィルは述べる。この「彼の内にある暗黒の大きな力」(243) は人間の生得的堕落観と原罪観に由来するものだともメルヴィルは指摘し、暗黒によって真実を表現する点でホーソーンはシェイクスピアに連なるとする。「シェイクスピアはハムレット、タイモン、リア、さらにイアゴーなどの暗い人物の口を通して、善良な人間ならば、本来のあるべき性格では、口に出したり仄めかすだけでも狂気に他ならないほどの恐るべき真実と思われるものを、巧みに語ったり、時には仄めかしたりする」(244) と論じて、この虚偽に溢れた世の中にあっては真実はどこかに逃げだしてしまうのだが、シェイクスピアや『真実を語る偉大な芸術』の巨匠にあっては真実は巧妙にほんのちらりと姿を現わすのだ、と言う。このように、メルヴィルはホーソーンをシェイクスピアや他の巨匠たちと同列に置き、シェイクスピアのごとき作家が今アメリカに生まれているのだ、と主張する。

そしてあの有名な「なぜアメリカ人は本など書くのか」とか「誰がアメリカの本など読むのか」⁸ といった 侮蔑的発言を明らかに念頭において、「いつの日か現代のイギリス人が書いた本など誰が読むかという日がやってくるのだ」(245-246) と述べ、文学の上でイギリスに追従するのを止め、「外国作家をむやみに誉めそやすことを控え、同時に我々アメリカの賞賛に値する

作家をそれ相応に認めるべきだ」(248)と熱っぽく文学的ナショナリズムを主張する。そして、まさにホーソーンを認められるべきアメリカ作家で、「ナサニエル・ホーソーンが今後どのような作品を書こうとも『旧牧師館の苔』は彼の究極の傑作と見なされるだろう」(253)と言う。

メルヴィルはこの評論の中で、個々の作品をかなり具体的に論評する。例えば“Buds and Bird-voices”は“delicious”(241)だと言い、“Fire-Worship”は一節を引用して“exquisite”(241)だと述べ、“The Old Apple Dealer”を取り上げてホーソーンの「深い優しさ、生きとし生けるものに対する無限の共感、あまねくいきわたる愛」(242)の例証とし、“Monsieur du Miroir”には「意味の神秘的深みがある」(243)と言い、“Earth’s Holocaust”のモラルは「深遠な、否、ぞっとさせる」(243)もので、“The Christmas Banquet”と“The Bosom Serpent”は精緻な分析に価すると述べる。(243)そして“Young Goodman Brown”はダンテに匹敵するほど深遠で、ホーソーンの暗黒を例証する作品だ(251)、などと言う。

要するに、この評論は、1) *Mosses* 中の若干の個別作品論、2) 闇の暗黒の作家としてのホーソーン論、3) 暗い人物によって真実を語る作家としてのシェイクスピア論、4) アメリカ作家の称揚と弁護論、という4点から構成されていると言える。

この中のシェイクスピア論は、メルヴィルが1849年2月頃からシェイクスピアにとりつかれて7巻本の作品集を読みあさり、線を引いたり書込みをしたりして、「シェイクスピアが後の世に生きていて、ブロードウェイを散歩することを切に祈願したい」⁹と述べたくらいシェイクスピアに入れあげたことの結果であって、やがて発表することになる *Moby-Dick* において、シェイクスピアからの刺激はもっと顕著に現われてくることになる。

闇の暗黒を強調した点は、個別作品の論議と共に、かなりメルヴィル自身の読み込みの傾向が強く、それ故に、ホーソーンを論じるよりは自分自身の

関心にホーソーンを引き寄せて自分を語ったとみなすことができる。この点で H.H. ホルチェ (Hoeltje) は、*Southern Literary Messenger* に載った H.T. タッカーマン (Tuckerman) の批評¹⁰ と比べてみると、タッカーマンは「よき批評家の第一の義務は著者が言わなければならないことを見ることだ」との意識を持っていたと述べ、この批評家のあるべきが姿勢がメルヴィルの評論では守られておらず、「大いに不満がある」と批判した。¹¹

確かに個別作品の解釈に関しては、タッカーマンの批評はホーソーン自身を満足させるものがあるのだが、¹² メルヴィルの評論を他の評論と比較するなら、メルヴィルの評論以前に発表されたものと比較することも大切だろう。

メルヴィルの評論が発表されるまでに、*Mosses from an Old Manse* を取り上げた評論はすでにいくつか発表されていた。その全てをメルヴィルが熟知していたとは思えないが、1847年11月の *Godey's Lady's Book* に載った E.A. ポーの “Tale-Writing—Nathaniel Hawthorne”¹³ のことはかなりよく知っていたに違いない。たとえ自分で読んでいなくても、ダイキंकを通して知っていたのではないかと思われる。というのは、メルヴィルの評論中の個別の作品論と暗黒論は、ポーの評論の向うをはったとは言えないまでも、補完するものと思えるからである。¹⁴

ポーの評論はホーソーンの *Twice-Told Tales* と *Mosses from An Old Manse* の書評の形をとった。ポーはドイツのティーク (Ludwich Tieck) の作品とホーソーンの類似を指摘してホーソーンの独創性を否定し、更にホーソーンのアレゴリー好みを批判してトランセンデンタリスト達や *North American Review* との関わりを断てと論じたが、短い作品の有効性についてこれまでに既に論じたことの繰返しを挿入して、ホーソーンの個々の作品について論じることは殆どなかった。ポーは「個々の作品について充分論議することは、目下用意している書物が与えるより良い機会まで延ばさなければならない」¹⁵ と述べたが、結局個々の作品の論議を他の機会にすることはなかった。その意味で、個々の作品いくつかに言及したメルヴィルはポーの

評論を補ったと言える。

さらに、ポーの評論にはホーソーンのアレゴリー好みを戒めた次のような一節がある。

He is infinitely too fond of allegory, and can never hope for popularity so long as he persists in it. This he will not do, for allegory is at war with the whole tone of his nature, which disports itself never so well as when escaping from the mysticism of his Goodman Browns and White Old Maids into the hearty, genial, but still Indian-summer sunshine of his Wakefields and Little Annie's Rambles.¹⁶

ここに明らかなように、ポーはホーソーンの本性は、夢か現実か幻覚かのあやめのつかないような真夜中の黒ミサを扱った“*Young Goodman Brown*”や、死んだ人間が生きているのが見掛けられ、悲鳴さえ聞こえてくるのに、現場に行ってみれば死体があっただけという“*The White Old Maid*”の様なミステリーじみた作品にあるのではないと主張し、“*Wakefield*”や“*Little Annie's Ramble*”のような明るい結末を迎えるスケッチ風の作品にこそホーソーンの本領があると考えた。つまり、“*Indian-summer sunshine*”がホーソーンの本性にふさわしいと言うのである。

ところがこれに対してメルヴィルは、先に少し見たように、ホーソーンの本質は暗黒面にあると言う。

...spite of all the Indian-summer sunlight on the hither side of Hawthorne's soul, the other side... is shrouded in a blackness, ten times black. (NN, 243)

ここでメルヴィルがポーの用いた“*Indian-summer sunshine*”という表現をふまえて、ポーを論駁していることは明らかである。そしてポーが“*Young Goodman Brown*”のミステリーを排したのに反して、先に見た

ように、メルヴィルはこの作品はダンテに匹敵するほど深遠だと言い、自分はホーソーンの暗さに引き付けられ魅惑されていると述べたのだった。ポーが持ち出したホーソーンとティークとの類似やアレゴリー好みの批判について、メルヴィルは何も言っていないが、暗黒面の強調は、当時のメルヴィルの関心の表れであるにしても、特にポーの論旨を念頭に置いてなされたものであることは否定できないだろう。

Ⅲ

メルヴィルの評論の大きな部分はアメリカ作家の弁護と称揚にあてられている。メルヴィルの主張を最も簡潔に言い表している表現を一つだけ取るとすれば、先に少しひいたこの文章になるだろう。

...while freely acknowledging all excellence, everywhere, we should refrain from unduly lauding foreign writers and, at the same time, duly recognize the meritorious writers that are our own. (NN, p. 248)

このようなアメリカ作家弁護論がメルヴィルの評論に入ってきたのは、ホーソーンをシェイクスピアに匹敵する作家とした論旨の延長線上にあることは否定できないけれども、アメリカ文学の弁護が、それまでにメルヴィルが発表してきた他の評論から想像できないほど熱烈であるとの印象はぬぐえない。¹⁷ なぜこのような激しいアメリカ作家弁護論を展開したのか。この問題には、この評論の執筆時刻の問題とともにメルヴィルとホーソーンがはじめて出会った8月5日の出来事が関わっている。そこでまずこの5日前後の出来事を少し追ってみることにしよう。

セレ임を出たいと考えていたホーソーンは、1850年の5月末になって、マサチューセッツ州西部のバークシャー地方のレノックスに落ち着いた。¹⁸ 一方メルヴィルは、1850年7月の中頃、同地方のピッツフィールドのいとこ

のロバート (Robert Melvill) が経営する下宿屋兼旅館で夏を過ごすため一家と共にやってきた。7月の半ば過ぎに、ロバートの母親でメルヴィルの伯母にあたるメアリー (Mary Ann Melvill) からホーソーンの *Mosses from an Old Manse* を贈られ、¹⁹ そこで4年ばかり前に出版されたこの短編集を始めて読んだ。

8月2日、メルヴィルを訪ねて、文芸誌 *Literary World* のダイキンクとこの雑誌の寄稿家で作家のマッシューズ (Cornelius Mathews) が休暇のためにニューヨークから汽車でやってきた。二人は車中でこの地方のストックブリッジに別荘を持っているニューヨークの弁護士フィールド (David D. Field) に会い、フィールドは月曜日の8月5日に「食事とホーソン訪問、[自宅近くの] モニュメント山へのピクニックなど」に二人を招いた。²⁰

ダイキンクは Wiley & Putnam 社の編集顧問として “Library of American Books” のシリーズでメルヴィルの *Typee* やホーソーンの *Mosses from an Old Manse* を出版して、²¹ 二人とは数年来の知己だった。さらにダイキンクは *Typee* をホーソンに贈り、ホーソンは好意的な短評を匿名で *Salem Advertiser* に掲げたことがあった。²² またダイキンクは文芸誌 *Arcturus* にホーソーンの初期の作品の書評やいくつかの作品を掲げ、²³ 1847年から編集した *Literary World* に時々メルヴィルの短い書評や記事を載せていた。²⁴

二人を結びつけるのに彼ほどふさわしい人はいなかったと言ってもよい。しかし、当初の計画ではホーソン宅を訪れる予定であったのが、ピクニックにホーソンも招くことになったのは、フィールド夫人がからんでいたように思われる。ダイキンクとマッシューズに会ったフィールドが自分の別荘に着いてみると、その前の日に知人の *Democratic Review* の編集長オ・サリヴァン (John L. O'Sullivan) がホーソン一家を連れて訪れ、近くの渓谷 Ice Glen でのたいまつ行列を見るため、ホーソン夫人とユナが一晩フィールド邸に泊まり、男達は泊らずに帰っていったことを知った。そこで、フ

フィールド夫妻は次の8月3日に二人でレノックスのホーソーン夫妻を訪れ、5日のピクニックと食事に正式に招待した。²⁵ ホーソーンを招くことはダイキンクが提案したのかもしれないが、²⁶ フィールド夫人がホーソーン一家を加えることに積極的だったと考えられる。

このようにしてホーソーンとメルヴィルは8月5日に会うよう予定されたのだが、二人のほかは何人かの人も加わった。その一人は *The Scarlet Letter* を単行本で出版することを勧めたボストンの Ticknor, Reed & Fields 社の J.T. フィールド (James T. Fields) だった。ホーソーンは8月4日に丁度新婚の妻を連れてパークシャーに来ていたフィールドズとレノックスのホテルで食事をする予定になっていた。ホーソーン夫妻はフィールドズ夫妻と食事をしたあと、四人でピッツフィールドの O.W. ホームズ (Oliver Wendell Holmes) を訪れた。²⁷ ホームズも5日に来ることになったが、彼の家はメルヴィルの滞在先の近くにあって、フィールドズ夫妻とホームズを加えることは、フィールド夫妻が訪れてきた時にホーソーン自身が提案したのだと思われる。このことが案外重大な結果をもたらすことになったのだった。

このようにして8月5日月曜日の朝、メルヴィル、ダイキンク、マッシュューズ、ホームズ、T.J. フィールド夫妻とホーソーンがそろった。夫と共に招かれていたホーソーンの妻ソファイアは来なかった。幼い子供達には山登りは無理だったろうし、つい先日一家でフィールド邸を訪れたばかりで、作家・編集者のこの集まりには遠慮したのかもしれない。さらにこのグループに、フィールド自身と彼の17才の娘ジニーと、ストックブリッジで夏を過ごしていたニューヨークの弁護士 H.D. セジウィック (Henry Dwight Sedgwick, Jr) が加わった。一行十名はモニュメント山に登り、途中で夕立ちにあったり、マッシュューズがブライアント (William Cullen Bryant) の “Monument Mountain” の詩を朗読したりした。一行は山から下りてフィールド邸で食事をし、食後この地のホテルに滞在していた歴史作家のヘッドリー (Joel Tyler Headley) が来て Ice Glen を案内し、その後お茶と談話が續

き、ホーソーンは「8時頃家に着いた」とその日の日記に書き、²⁹ ダイキンクは10時に汽車でメルヴィルの家に帰ったと、次の日に妻に報告した。³⁰

このようにしてメルヴィルとホーソーンが初めて出会った記念すべき8月5日のことについて、ダイキンクは“a rare meeting,” “literally the great event” と述べ、³¹ フィールドは20年ばかり後になっても “This 5th of August was a happy day throughout.”³² と記したほどだった。のみならず、女性以外の参加した人たち自身がこの日のことをそれぞれ日記や手紙、雑誌記事、回想録などに記しており、³³ それにもとづいてホーソーンとメルヴィルの伝記でもこの日のことは詳しく言及している。³⁴ ところが注目してよいのは、メルヴィルとホームズがこの日のことを記録や回想録のような形で残していないことである。このことには後で再び言及する。

さて、当日集まった人の中で、ホーソーンが最年長（1804年生）で、文学に関係した人ではメルヴィルが最年少（1819年生）、そしてホーソーンはダイキンクをはじめとしてフィールド、フィールド夫妻、ホームズ、セジウィックとも親しかった。上に見たようにホーソーンが親しい人を加えたからだった。ところが最年少のメルヴィルが親しかったのは、ダイキンクだけだった。モニュメント山に登ったとき、最年長のホーソーンとダイキンクが先頭にたち、二人は *The Scarlet Letter* について話を交わした。³⁵ このことが雄弁に示しているように、文学に係わっている人の多いこのグループは、山に登りながらも、文学に関する様々な話題について話を交わしたに違い無い。だが、メルヴィルが山に登りながら誰かと盛んに文学について語ったという記録はない。彼の唯一の知己ダイキンクはホーソーンと先頭に立っていたからである。山でのメルヴィルの目立った行動といえば、モニュメント山の頂上で突き出た岩のうえに登ったことだった。³⁶ かって船乗りとして高いマストに登っていたから高いところは怖くないということを人前で誇示したかったのだろうか。それとも未知の人の多いこのグループの中で、若い自己の存在をこのような形で示したかったのだろうか。それはともあれ、フィールド

邸に帰ってくると、メルヴィルも文学論に加わって、自己主張をすることになったようだ。

フィールド邸での食事にはかなり酒が出たようだし、次のような位置で一同は食卓についた。³⁷

Host: D.D. フィールド

○

ダイキンク	○	○ セジウィック
フィールド嬢	○	○ フィールズ
メルヴィル	○	○ フィールズ夫人
マシューズ	○	○ ホーソーン
ホームズ	○	○ 年配の女性

○

Hostess: フィールド夫人

メルヴィルは右隣の比較的年齢の近いマシューズ（1817年生）、その隣のホームズ、斜め前のホーソーンなどと語り合える機会にめぐまれたと思われる。

IV

フィールド邸での話題の一つはイギリス人とアメリカ人の体格の問題だった。マシューズはこう書いている。

...one of the gentlemen [Holmes]... gave it as his deliberate opinion and as the result of a most elaborate and searching scrutiny, that in less than twenty years it would be a common thing to grow in these United States men sixteen and seventeen feet high; and intellectual in proportion.³⁸

ここで言っている「紳士の一人」が誰なのかマシューズは明らかにしていな

いので、*Melville Log* では上に引用したように ホームズを与えているが、フィールドズの回想から推すと、ホーソーンと見なしてもよさそうに思える。フィールドズは21年後にこの日のことを回想して、多少出来事の順序の記憶に混乱があったようだが、英米人の体格の話題について次のように記している。

I remember the conversation at table chiefly ran on the physical differences between the present American and English men, Hawthorne stoutly taking part in favor of the American.³⁹

この話題でホーソーンがアメリカ人の方に傾いたのは興味深いが、問題は体格だけのことではなかった。イギリス人とアメリカ人を比較し、様々な面での優位性にまで話題は広がったらしい。

ダイキンクは次の日の6日に、妻宛の手紙で5日の出来事を細かく知らせ、次のように書いた。この手紙が伝えている幾つかの点は注目に値する。

Dr Holmes said some of his best things and drew the whole company out by laying down various propositions of the superiority of Englishmen. Melville attacked him vigorously. Hawthorne looked on and Fields his publisher smiled with internal satisfaction underneath his curled whiskers at the good tokens of a brilliant poems from Holmes in a few days at the Yale College celebration.⁴⁰

ホームズはイギリス人の方の優位性を主張した。それには何事につけアメリカのものを称揚し高く評価しようとしていたマッシュューズを揶揄する意図があったことは疑いない。マッシュューズはアメリカ作家の著作権を守ることに熱心で、既に *An Appel to American Authors and the Americal Press, in Behalf of International Copyright* (1842) などの著書があったばかりでなく、⁴¹ アメリカの偉大さ・優秀さを示すと思われるテーマを好んで喧宣し、自分の作品 *Behemoth; A Legend of the Mound-builders* (1839), *Big Abel and the Little*

Manhattan (1845) にとりこんでいた。ボストンの知識人であり作家でもあった J.R. ローウェル (Lowell) は *A Fable for Critics* (1848) の中でマッシュューズのことを “a small man in glasses... dodging about, muttering ‘Murderers! asses!’” と描き “slavish respect to John Bull/All American authors who have more or less/ Of that anti-America humbug—success.”⁴² を繰り返し非難した、と述べていた。ローウェルと同じくボストンの知識人であり作家であるホームズがマッシュューズを揶揄してイギリス人の優位性を主張したのに対して、メルヴィルが反論した、というのである。メルヴィルはその前の年にイギリスの版權を得るために渡英していて、版權問題についてはマッシュューズの立場に共鳴していたことだろう。メルヴィルがホームズに反論したのは、マッシュューズ弁護の意味があったのか、それともボストン人への反撥もあったのか、アメリカ作家弁護の熱意に燃えていたからなのか、その点は必ずしも明らかでない。この日の議論の詳細についての資料がないからである。この三人の反対側に座っていたホーソーンは、上のダイキンクの手紙の描き方から判断すると、三人の議論を傍観していたようだが、かって好意的な短評を書いてやった *Typee* の著者の議論に興味をもって耳を傾けていたに違いない。

さらに、先のダイキンクの手紙の後半に言及しているイエール・カレッジの件は、8月14日にホームズがイエールの Phi Beta Kappa の集まりで詩を朗読する予定があったことを指している。ダイキンクは次の日に妻に手紙を書いた時点でこの予定を知っていたばかりでなく、その詩でホームズがどのようなことをとりあげるかをもあらかじめ知っていたと考えられる。恐らくホームズ自身が何らかの形で語ったのだろう。そして確かにその通り、ホームズは8月14日に “Astræa: The Balance of Illusion” という740行ばかりの詩を朗読した。⁴³

この詩は折りにふれての感慨や感想をカプレットで表したもののだが、つい先日会った人のことに何らかの形で言及している。例えば次の一節はホー

ソーンの *The Scarlet Letter* への allusion であることは明白だろう。

I snatch the book along whose burning leaves/His scarlet web
our wild romancer weaves,/Yet, while proud Hester's fiery
pangs I share,/My old MAGNALIA must be standing there!⁴⁴

ホームズはこの詩の中で、ニューヨークの批評家や作家達が自分達の文学、ひいてはアメリカ文学を、些少なものであるにも拘らず誇大に評価していると批判し、次のように揶揄した。

But Hudson's banks.../ Swell the small creature to alarming
size;/... Titanic pygmies, shining light obscure,/His favored
sheets have managed to secure,/Whose wide renown beyond
their own abode/Extends for miles along the Harlaem road;...
(p. 179)

ここに言及している“the small creature”がマッシュューズを指していることは、容易に読み取れる。さらにこのあとホームズは、

He cry “provincial,” with imperious brow!/... A third-rate
college licked him to the shape,/Not of the scholar, but the
scholar's ape! (pp. 179–180)

と述べた。ハーヴァードの医学部教授のホームズが1831年創立の若いニューヨーク・カレッジ（今日の New York City University の前身）を「三流のカレッジ」とさげすみ、そこで学んだマッシュューズを「学者の猿まね」とせせら笑ったことは明らかだろう。

マッシュューズに代表されるようなニューヨークの文学界の自己誇大視の傾向を、ボストンを代表するエリートのホームズがこのように戒めて批判することが明らかになっていたからこそ、ダイキンクは、先程の手紙にあるように、ボストンの出版社のフィールズは満足げに微笑んだと述べたのだろう。そし

て恐らくダイキンクはその一方で、ホームズに対抗したメルヴィルに向かって、自分の主張を何らかの形で発表することを密かに勧めたのではなかろうか。メルヴィルの“Hawthorne and His Mosses”のかなりの部分がアメリカ作家・アメリカ文学の弁護と称揚に当てられたのは、そのためであると思われる。

しかもダイキンクがメルヴィルに校正をさせないままこの原稿を急いで8月17日の *Literary World* に掲げたのは、ホームズの詩が8月14日のイエール・カレッジの Phi Beta Kappa の集まりで発表されることを知っていて、その詩の発表との時間的なタイミングを考えた上でのことだったと考えられる。つまり、少し言い方をかえれば、ダイキンクはニューヨークの文学や作家達の誇張や誇大視に対するホームズの批判を予期していて、その向こうをはるようなものをメルヴィルに期待したのではなかろうか。そしてたまたまそのときホーソーンの *Mosses from an Old Manse* を読んだばかりで、その筆者に感激していたに違い無いメルヴィルは、この作品の書評の一部でダイキンクの徳義に応えたのではなかろうか。メルヴィルの評論のアメリカ文学称揚・アメリカ作家弁護は、このように8月5日のホームズとの議論に著しく触発された結果だと考えることができる。しかし、このことは当然この評論の執筆時期の問題がからんでいる。メルヴィルはいつこの評論を書いたのか。この点を少し考えてみたい。

V

メルヴィルが訪れてきたダイキンクに *Mosses from an Old Manse* を比較的最近に読んだことを告げたのは間違いないと思われるのだが、この作品の書評が8月5日までにすでに執筆されていたのか、それとも8月5日以後に書かれたのか、定説はないようだ。ダイキンクは8月9日に帰る予定だったらしいが、「幾つかの事情」があって、予定を変えて月曜の12日に帰ることにした。⁴⁵ その事情が何であったのかダイキンクは明らかにしていないが、

恐らくメルヴィルの評論の原稿の完成、或は、原稿の清書の完成を待っていたのではないかと思われる。

“Hawthorne and His Mosses”の執筆時期について、ハワード (Leon Howard) はメルヴィルがホーソーンと出会ってからこの評論を書いたとし、⁴⁶ *Melville Log* も初版では8月11日に書き始めたように記したが、⁴⁷ 1969年の第二版の補遺では、書き始めたのは「7月の末か？」と訂正した。⁴⁸ 8月5日の出会い以後の執筆を支える大きな根拠は、メルヴィルが語ったとホーソーンの妻が伝える次の手紙中の言葉である。

the Review was too carelessly written... he dashed it off in great haste & did not see the proof sheets,...⁴⁹

ところがその一方で、ホーソーンの妻はこの評論を書いたときメルヴィルはまだホーソーンに会えることなど思ってもいなかったと伝えている。⁵⁰ また評論の中でも、メルヴィル自身がホーソーンにまだ会っていないという言い方をとっている。⁵¹

メルヴィル学者のハリソン・ヘイフォードは、執筆はホーソーン達とモニュメント山に登った後、ダイキンクの一団が滞在中の合間を縫ってなされたと考えたらしいが、⁵² メルヴィルの手紙集を編纂したデイヴィスとギルマン (M. R. Davis & W.H. Gilman) は “The evidence is conflicting as to whether Melville wrote the essay before or after he met Hawthorne.” と述べている。⁵³ メルヴィル全集の Northwestern-Newberry 版では、先に述べたように、原稿にもとづいてメルヴィルの意図を復元した版を取めたが、その “Historical Note” を執筆したシールツ (Merton M. Sealts) は「評論の一部は二人の重大な出会い以前に書かれたのかもしれないが、原稿の抹消された表現が強く示しているように、少なくとも一部は[8月5日の]会食以降に始めて書かれた」⁵⁴ と述べた。

メルヴィルの評論の第23パラグラフの中程に、アリメカ作家の独自性を主

張し、イギリスに追従することを戒めた有名な一節がある。*Literary World* に掲げたテキストによると次のようになっている。

...no American writer should write like an Englishman or a Frenchman; let him write like a man, for then he will be sure to write like an American. Let us away with this leaven of literary flunkeyism towards England. If either must play the flunkey in this thing, let England do it, not us.⁵⁵

ところがこの箇所は、メルヴィルの原稿では“Let us away with”の続きに“this Bostonian leaven...”とあって、印刷に際してこの Bostonian が削られたのだった。NN 版のテキストでは、先に触れたように、このような原稿の削除・抹消部分を全て復活した。メルヴィルがこの箇所を原稿で「ボストン人の気風となっているイギリスに対する文学上の追従主義を払い捨てよう」(p. 248)と書いたのは、明らかに8月5日のホームズの論議を意識してのことだったと考えられる。この文章から「ボストン人」が削られたのは、恐らく *Literary World* のダイキンの判断をいれたためだろう。ダイキンはボストンの知識人や作家達を必要以上に刺激したくはなかっただろうし、メルヴィルもホームズに直接向けたと思われるような批判は避けるべきだということを悟ったのかもしれない。「ボストン人」が残っておれば、8月5日の論争でボストン人の立場をあらわに見せたホームズに対する批判が明らかになり、匿名で発表したこの論文の筆者が少なくとも当日その場に居合わせた人たちに明らかになってしまう。ましてメルヴィルはピッツフィールドのホームズの家のおすぐ近くに住んでいて、自分があからさまなホームズ批判をやったと思われなくなかったに違い無い。この評論を匿名にしたこと自体の大きな理由も、この点にあったと思われる。シールツはNN版の“Historical Note”でこの“Bostonian”の削除を根拠にして、この箇所は少なくともホームズとメルヴィルの論争の後に執筆されたとしたが、⁵⁶ シールツの見解は非常に控えめな判断を下したものと言うべきだろう。むしろ、この箇所を

含むアメリカ作家の独自性の主張とイギリス追従拒否の姿勢を示した部分は、8月5日のホームズとの議論の後で書かれたと考えてよいのではないと思われる。

もう一つ考えなければならないのは、8月5日のあとメルヴィルにはこの評論全部を書くような時間的余裕がなかったと思われることである。5日のあとメルヴィルはダイキンクの一行と行動を共にすることが多かった。すなわち、6日はダイキンクが忙しかったけれども、7日には妻をも加えて皆で近くのレバノンを訪れ、8日にはレノックスのホーソン宅を訪れたあとストックブリッジへ行った。9日は雨で、ダイキンクは予定していたピクニックを10日に繰り下げて行い、11日はシェイカー教徒の村を訪問して、12日にニューヨークに帰った。メルヴィルが10日・11日にダイキンクに同行したかどうかは明らかでないが、この評論の原稿はメルヴィルの妻が清書したものに更にメルヴィルが加筆訂正をしているから、清書のもとになる草稿ができ、それを妻が清書し、さらにそれにメルヴィルが加筆訂正して、12日の朝ダイキンクがニューヨークに向けて出立するまでに渡すには、8月5日以降にはじめて執筆を開始していたのではとても間に合わないと考えられる。つまり、シェイクスピアにひっかけてホーソン論と個別作品論の部分は8月5日以前に何らかの形で書き始められており、アメリカ文学論、アメリカ作家弁護論は8月5日以後に5日の議論をふまえて評論の後半に加えられたと考えるのが妥当と思われる。

8月5日のピクニックに参加した人たちの中で、ホームズとメルヴィルの二人だけが記録ないしは回顧録を残していないと先に述べたが、二人の心に大きく留ったのは、モニュメント山の山登りやフィールド邸での食事そのものではなくて、マッシューズを巻き込んだ文学論だったということができる。

8月5日にホーソンとメルヴィルが二人だけで会ったのではなく、他の人がいたこと、特にマッシューズやホームズがいて議論が賑わったことは、この8月5日の出来事の中でも意義深いことだったと言わねばならない。ホー

ムズは自分の立場を“*Astraea*”にもり込み、その一方で、メルヴィルはアメリカ作家弁護の熱っぽい議論を“*Hawthorne and His Mosses*”にもり込んだ。ホームズとメルヴィルの二人にとってはこれらの作品が8月5日の貴重な記録であって、これ以外の記録は必要なかったと考えられる。

* * *

メルヴィルの評論“*Hawthorne and his Mosses*”は、ホーソーンの闇の暗黒を強調したり、シェイクスピアの暗い人物に対する興味を示したりして、当時のメルヴィルの関心の所在を雄弁に語っていることは明らかなが、今見てきたように、*Mosses from an Old Manse*の書評としてポーの評論と関わり、8月5日のホームズとの論争にも大きく関係していた。だが8月5日の出来事は、メルヴィルとホームズとの論争だけに終わるものではなかった。この日にメルヴィルとホーソーンは一部の作品だけを通して知っていた作家その人を互いに知り合い、ホーソーンもメルヴィルに好意を持ち、二人の親交が始まるきっかけになったことは周知の通りである。ホーソーンは友人のホレイショー・ブリッジに8月7日付けで“I met Melville, the other day, and liked him so much that I have asked him to spend a few days with me before leaving these parts.”⁵⁷と書き、二日前に会ったばかりのメルヴィルを自宅に数日招く予定であることを伝えた。(メルヴィルの訪問は9月3日ー7日に実現した。⁵⁸)さらにホーソーンはメルヴィルに会った直後に、まだ読んでいなかったメルヴィルの作品をダイキンクに頼んで届けてもらい、直ちに読んで読後感を次のようにダイキンクに伝えた。

I have read Melville's works with a progressive appreciation of the author. No writer ever put the reality before his reader more unflinchingly than he does in “Redburn,” and “White Jacket.” “Mardi” is a rich book, with depths here and there that compel a man to swim for his life. It is so good that one scarcely pardons the writer for not having brooded long over it,

so as to make it a great deal better.⁵⁹

その上、メルヴィルが匿名で発表した“Hawthorne and His Mosses”が
 ホーソーンに喜ばれ、⁶⁰ メルヴィルが筆者であることが明らかになって、二
 人の関係がより深まったこともよく知られている。メルヴィルは間もなくこ
 の地に家を買って住むことになり、二人の交際はさらに密になった。

すでに別のところで論じたように、⁶¹ ポーの1847年の評論がホーソーンと
 の関係を断絶に導いたのに較べると、メルヴィルの評論“Hawthorne and
 His Mosses”は8月5日の二人の出会いと並んで、彼自身のホーソーン発
 見の“shock of recognition”(NN, p. 249)の記録として大きな歴史的意義
 があっただけでなく、偉大な二人のアメリカ作家を結び付けることにもなっ
 たのだった。

注

この小論は渥美正平・北垣宗治両教授御退職記念論文集に予定していたが、個人的
 な事情で脱稿がおくれた。ここに改めてこの小論を両教授に捧げたい。

1 Herman Melville, “Hawthorne and His Mosses,” *The Piazza Tales and Other
 Prose Pieces 1839-1860*, ed. Harrison Hayford et al., “The Writings of Herman
 Melville, The Northwestern-Newberry Edition” (Evanston: Northwestern UP
 and The Newberry Library, 1987), IX, 249. 以下メルヴィルの評論はこの版に
 より、NN と略して本文中に頁数を示す。

2 例えば、有名なことだが、第15パラグラフに“Lear...speaks the sane madness
 of vital truth.”(NN, p. 244)とあるところを *Literary World* では“same madness”
 と印刷した。この誤はメルヴィル自身がホーソーンの妻に語った。Cf. Sophia's letter
 to her mother, quoted in Eleanor Melville Metcalf, *Herman Melville: Cycle and
 Epicycle* (Cambridge: Harvard UP, 1953), p. 92. 以下この書物は Metcalf と略
 すことにする。この評論のテキスト上の問題については、NN 版の“Editorial Ap-
 pendix”に詳しい。

3 Cf. Willard Thorp (ed.), *Herman Melville/Representative Selections* (New York:
 American Book Co., c 1938), p. 422. 例えば注2に取り上げた箇所は“same mad-
 ness”のままになっている(p. 334)。

4 Cf. Jay Leyda (ed.), *The Portable Melville* (New York: The Viking Press,

- 1952), p. 743. この Leyda 版では “same” は “sane” と直されたが (p. 407), 第 18 パラグラフ (Some may start...で始まる) では, “was hooted at” とあるところを, *Literary World* 版, Thorp 版と同じく “was looked at” (p. 410) と記している。
- 5 Edmund Wilson (ed.), *The Shock of Recognition* (New York: The Modern Library, c1955). 例えば “It is curious how...” ではじまる第 3 パラグラフの中頃 “It may be...that all this while the book, ...” に続く箇所は, 原稿では “like wine” と書かれていたが, *Literary World* では “likewise” と印刷した。これは Thorp 版, Leyda 版とも原稿通り “like wine” と訂正したが Wilson 版では “likewise” となっている。(Cf. Thorp, p. 329; Leyda, p. 401; Wilson, p. 188.)
- 6 Harrison Hayford and Hershel Parker (ed.), *Moby-Dick*, “Norton Critical Edition” (New York: W.W. Norton, c1967).
- 7 上記注 1 参照。注 2, 4, 5 で言及した言葉はそれぞれ NN, pp. 244, 246, 240 にあり, p. 674 の “Notes on ‘Mosses’” でメルヴィルの消書原稿の言葉を記している。
- 8 Quoted in Kay S. House (ed.), *Reality and Myth in American Literature* (Fawcett Premier Book; Greenwich, Conn.: Fawcett Pub., c1966), p. 100.
- 9 Jay Leyda (ed.), *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville 1819–1891* (New York: Harcourt, Brace, 1951), pp. 288 & 292. 以下この書物は *Melville Log* と略す。
- 10 “Hawthorne as a psychological novelist,” from ‘Nathaniel Hawthorne’, in the *Southern Literary Messenger*, June 1851, in J. Donald Crowley (ed.), *Hawthorne/The Critical Heritage* (New York: Barnes & Noble, 1970), pp. 210–218.
- 11 Hubert H. Hoeltje, “Hawthorne, Melville, and ‘Blackness,’” in B. Bernard Cohen (ed.), *The Recognition of Nathaniel Hawthorne* (Ann Arbor: U of Michigan P, c1969), p. 265.
- 12 ホーソーンはタッカーマンに寄せた手紙の中で次のように書いた。“It [your article] gave me, I must confess, the pleasantest sensation I have ever experienced, from any cause connected with literature: not so much for the sake of the praise as because I felt that you saw into my books and understood what I meant. I cannot thank you enough for it.” (Hawthorne’s letter to Tuckerman, June 20, 1851, Hawthorne, *The Letters, 1843–1853*, “The Centenary Edition” [Columbus: Ohio State UP, c1985], XVI, 452.) 以下ホーソーンの手紙はこの版により, *NH Letters* と略す。

- 13 Poe, *Essays and Reviews*, "The Library of America" (New York: Literary Classics of the United States, Inc., c1984), pp. 577-88.
- 14 このことについてはすでに下記の論文で少し触れた。松山信直「Poe と Hawthorne の関係 (その3) - Poe の1847年の Hawthorne 論」, 『同志社大学英語英文学研究』50号 (1990年3月)。
- 15 Poe, *Essays and Reviews*, p. 587.
- 16 *Loc. cit.*
- 17 それまでに発表したメルヴィルの評論には次のものがあった。いずれも *Literary World* に掲げられた。"Etchings of a Whaling Cruise," March 6, 1847 (NN, IX, 627); "Mr Parkman's Tour," March 31, 1849 (NN, IX, 639); "Cooper's New Novel," April 28, 1849, (NN, IX, 646); "A Thought on Book-Binding," March 16, 1850 (NN, IX, 651).
- 18 Hawthorne's letter to Horace Mann, August 8, 1949, *NH Letters*, p.293. および Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New York: Oxford UP, 1980), pp.209-210. 以下この伝記は *NHB* と略す。
- 19 *Melville Log*, pp.378-9.
- 20 Duyckinck's letter to his wife Margaret, [August 3], Metcalf, pp. 79-80.
- 21 Donald Yannella, "Evert A. Duyckinck" in Joel Myerson (ed.), *Antebellum Writers in New York and the South*, "DLB," vol. 3 (Detroit: Gale Research Co., 1979), p.103.
- 22 R. Stewart, "Hawthorne's Contributions to *The Salem Advertiser*," *AL* V, 327-341; Hawthorne's letter to Duyckinck, April 15, 1846, *NH Letters*, p.153.
- 23 Nina E. Browne, *A Bibliography of Nathaniel Hawthorne* (1905; New York: Burt Franklin, 1968), pp.152-153.
- 24 上記注17参照。
- 25 Luther S. Mansfield, "Melville and Hawthorne in the Berkshires," in Howard P. Vincent (ed.), *Melville and Hawthorne in the Berkshires* (Kent, Ohio: The Kent State UP, c1968), pp.9-10. 及び Sophia's letter to her sister Lizzy, Metcalf, p.85.
- 26 Mansfield, p.10.
- 27 Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, ed. Claude M. Simpson, "The Centenary Edition" (Columbus: Ohio State UP, 1972), VIII, 295. 以下 *Am Nb* と略す。及び Mansfield, p.10.
- 28 Duyckinck's letter to his wife, Metcalf, pp.81-83; Mansfield, p.10.
- 29 *Am Nb*, p. 295.

- 30 Duyckinck's letter to his wife, Metcalf, p.83.
- 31 Duyckinck's letters to his wife, August 6, and to his brother George, August 7, Metcalf, p.83.
- 32 Fields, *Yesterdays with Authors* (Boston: Houghton, Mifflin, 1871), p.53.
- 33 注31と32に示した Duyckinck と Fields の他に次のものがある。
Hawthorne, *Am Nb* (August 5, 1850), p. 295.
Mathews, "Several Days in Berkshire," *Literary World*, August 24, 1850 (*Melville Log*, pp. 383-387 passim).
Headley, "Berkshire Scenery," *New York Observer*, September 14, 1850 (*Melville Log*, Supplement, p. 923).
Sedgwick, "Reminiscences of Literary Berkshire," *Century Magazine*, n.s. XXVIII (August 1895) (*Melville Log*, p. 385).
- 34 伝記では, Turner の *NHB* の他に次のものが取り上げている。
Randall Stewart, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New Haven: Yale UP, c 1948), p.107.
Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (Berkeley: U of California P, c 1951), pp. 155-158. 以下 *HMB* と略す。
James R. Mellow, *Nathaniel Hawthorne in his Times* (Boston: Houghton, Mifflin, c 1980), pp. 330-333.
- 35 Duyckinck's letter to his wife, Metcalf, p.82.
- 36 *Loc. cit.*
- 37 Mansfield, p. 11. マッシュューズの記事によっている。
- 38 Mathews, quoted in *Melville Log*, p.384.
- 39 J.T. Fields, p.53.
- 40 Duyckinck's letter to his wife, Metcalf, p. 82.
- 41 以下マッシュューズのことは Allen F. Stein, "Cornelius Mathews," Joel Myerson (ed.), *Antebellum Writers*, "DLB," 3, 211-213. による。
- 42 Quoted in "DLB," 3, 211.
- 43 このことはすでに Leon Howard が *HMB* で若干言及しているが, 作品名は *Astræe* と表記している。(pp. 157-158)
- 44 Oliver W. Holmes, "Astræa," *Poems* (Philadelphia; Henry Altamus Co., n.d.), p. 166. 以下この詩からの引用は本文中に頁数を与える。
- 45 Duyckinck's letter to his wife, August 9, Metcalf, p.86.
- 46 Howard, *HMB*, p.156.
- 47 *Melville Log*, p.387.

- 48 *Ibid* [Supplement], p.922.
- 49 Metcalf, p.92
- 50 “He [Melville] had no idea when he wrote it that he should ever see Mr. Hawthorne.” (Metcalf, p.91)
- 51 NN, p.249.
- 52 Cf. Merrell R. Davis & William H. Gilman (ed.), *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale UP, 1960), p.113, note 3.
- 53 *Loc. cit.*
- 54 “Historical Note,” “Editorial Appendix,” *Piazza Tales*, NN, p.472.
- 55 *The Critical Heritage*, p. 120. この本に収められたメルヴィルのホーソン論は *Literary World* に掲載した版にもとづいている。
- 56 NN, p.473.
- 57 Hawthorne’s letter, August 7, 1850, *NH Letters*, p.355.
- 58 Hawthorne, *Am Nb*, p.297.
- 59 Hawthorne’s letter to E.A. Duyckinck, August 29, 1850, *NH Letters*, p.362.
- 60 *Loc. cit.*
- 61 拙論「Poe と Hawthorne の関係 (その3)」上記注14参照。

1991. 4. 30 受理

Synopsis**Melville's Article on Hawthorne****—A Study on the Relationship between
Melville and Hawthorne****Nobunao Matsuyama**

In "Hawthorne and His Mosses," first published in the *Literary World* for August 17 and 24, 1850, Melville discussed Hawthorne and his second collection of short pieces, *Mosses from an Old Manse* (1846). But his discussions extended so far as to cover the arguments on Shakespeare and furthermore to defend American authors and their works.

With this essay there have been some textual problems since its first appearance. Some of them are due to printer's errors as Melville was not given the chance of reading the proofs. The most famous error is found in a passage where King Lear is referred to as speaking "the same madness of vital truth." What Melville intended was an oxymoron, "sane madness." In the Northwestern-Newberry edition of Melville's works many other cases of Melville's original intention as revealed in the MS, a fair copy prepared by Mrs Melville and corrected by Melville himself, were examined and adopted after due consideration.

Despite this "authentic" edition, some related questions still remain unsolved; for example, why did Evert Duyckinck, the editor of the *Literary World*, so hasten in publishing this article in the August

17 issue as not to allow Melville to read the proof? When was this article written? Was it written before August 5, 1850, when Melville met with Hawthorne and others in the picnic at Monument Mountain, or after that date?

One of the characteristics of this essay is Melville's emphasis on the blackness of darkness in Hawthorne. It is true that Melville's mounting interest in the dark and tragic aspect of man and his universe led him to emphasize Hawthorne's darkness. But why did he put so much emphasis on the dark aspect of Hawthorne? Another characteristic is the enthusiastic defense of American authors and their works with emphasis not known in his other reviews. Why that much enthusiasm? It cannot be accounted for simply by his interest in Hawthorne alone.

The present article is to answer these questions by comparing Melville's essay with Poe's review and by examining the memorable picnic of August 5 and also Oliver Wendell Holmes's poem "Astræa." Melville intended in his article, it seems, to refute Poe's contention that Hawthorne's essence is to be found in the Indian-summer sunlight of such works as "Wakefield" or "Little Annie's Ramble." Melville intended also to refute what Holmes would say in his poem to be read at a meeting of Phi Beta Kappa of Yale College on August 14. What was interesting, among others, when Melville met with Hawthorne for the first time on August 5, was that Melville attacked Holmes who insisted on the superiority of Englishmen. Duyckinck knew somehow in advance what would be Holmes's attitude in his Phi Beta Kappa poem and most probably encouraged Melville to develop at his earliest convenience

such ideas of his own as would argue against Holmes's on the situation of American authors and their books. Obviously Melville had written before August 5 the passages in which he discussed Hawthorne and Shakespeare, but the fervid discussions in defense of American authors and the denunciation of the "Bostonian leaven of literary flunkeyism" were written after the hot arguments he held with Holmes on August 5.

Hawthorne must have been deeply impressed with Melville. For, only two days after the first encounter with Melville, he revealed his willingness to invite Melville to his house for a few days, and also he asked Duyckinck to send some of Melville's books that he had not yet read. Thus before he came to know Melville's article Hawthorne showed an unusual interest in Melville, and after he read the article and knew who wrote it he was more pleased to find in Melville an avid admirer for himself. While Poe's 1847 article on Hawthorne caused the rupture of their relationship, Melville's successfully contributed to a friendly association with Hawthorne.